

国立国会図書館所蔵の和刻本漢籍概観

井坂清信

はじめに

1. 百万塔陀羅尼から室町時代まで
2. 古活字版の時代
3. 江戸前期
—内典中心から外典中心へ—
4. 江戸中期 —漢学全盛時代—
5. 江戸後期
—官版・藩版の盛行と漢訳西書—
おわりに

本稿は、昨年5月8日に早稲田大学国際会議場で開催された「近世漢籍国際会議」において、「国立国会図書館所蔵の和刻本漢籍」と題して行った発表の原稿に補筆訂正を加えたものである。

はじめに

国立国会図書館では、昭和62年3月に『国立国会図書館漢籍目録』を刊行いたしました。この目録は分類目録で、まだ索引ができておりませんのでなかなか引きにくいのですが、漢籍についての総合的な検索ツールのなかった頃に比べますと、大分検索が容易になりました。因にこの索引は、平成5年度中には刊行される予定になっております。

この目録には、昭和56年12月末現在整理済みの図書が収録されていて、その総数は23,943タイトル、原装で214,445冊となっております。この中には、中国で刊行されたいわゆる唐本のほかに、朝鮮本・安南本・和刻本、さらに民国以後刊行された中国書も含まれております。

この目録では、清代以前の著書には四部分類を適用しまして、経・史・子・集・

叢書の各部に分類し、民国以後の著書に対しては新学部を設け、十進分類系の分類によって排列しております。各部別のタイトル数は、経部が1,357、史部が5,557、子部が4,526、集部が2,914、叢書部が475、最後に新学部が9,114となっております。現在、毎年二、三千冊の中国語図書が入ってきておりますので、新学部の数は若干増加しているものと思われませんが、その他の各部につきましては、さしたる変化はないとみてもいいでしょう。

ところで、当館所蔵の漢籍は、ほかのもろもろの資料と同様に、旧帝国図書館および貴族院・衆議院の各図書室から引き継いだものと、戦後、昭和23年に当館が創設された後に収集されたものことから成っております。そして、戦前にも戦後にも、現在の当館漢籍コレクションの主要な部分を占めることとなる大口の収集がいくつかありました。ここではこうし

た当館の漢籍コレクション形成の経緯について詳しくお話申し上げる余裕はありませんので、文部省交付本について一言触れておきたいと思います。

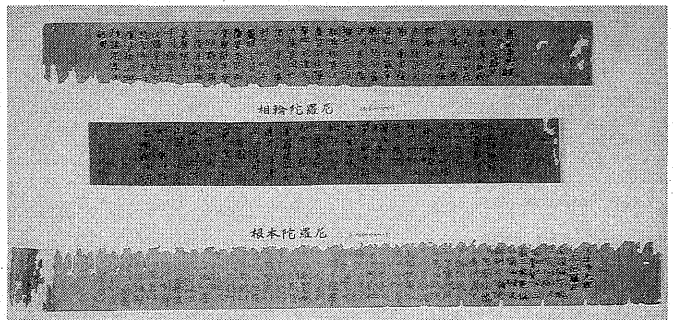
明治4年の廃藩置県の後、文部省は各府県から旧藩蔵書の日録を提出させて、蔵書の回収を始めました。旧帝国図書館の前身であります東京書籍館は、その折文部省に申請いたしまして、これらの書籍の交付を受けることになりました。これがいわゆる文部省交付本でございます。明治8, 9, 11年に交付されました書籍の数は、和漢書あわせて総計3,183タイトル、43,630冊にも上ります。このうち漢籍の占める割合は、タイトル数で四分の一強になり、その内容は四部分類のすべての分野に亘っております。当館の漢籍コレクションは、この文部省交付本が核となり、さらにその後の収集活動によって補強されてきて、現在に至っているわけであります。

これから私がお話し申し上げようと思っておりますのは、この文部省交付本の中にも数多く含まれておりました和刻本漢籍についてであります。和刻本漢籍といいますのは、申すまでもなく国産の漢籍版本のことでございます。中国や朝鮮

から我が国に伝来しました漢籍もしくはこれを我が国で書写したものを、我が国で覆刻もしくは翻刻したものを意味します。現在我が国に伝存する漢籍(新学部を除く)は、数量的にみますと、我が国での書写本とこの和刻本とが大部分を占めると云われております。とりわけ漢学が大いに栄えました江戸時代における和刻本の盛況には、まことに目を瞠るものがあります。当館では、この和刻本漢籍を約2,800点ほど所蔵しております。そこでこれから我が国における漢籍の覆刻・翻刻の歴史を辿りつつ、当館所蔵本中の主なものをご紹介しますまいりたいと思います。

1. 百万塔陀羅尼から 室町時代まで

現存する日本最古の印刷物は、いわゆる百万塔陀羅尼でございます。これはご承知のように、『無垢浄光大陀羅尼經』の中の根本・相輪・自心印・六度の四種類の陀羅尼を印刷し、百万個の小塔に納めまして、法隆寺・東大寺・西大寺・薬師寺等の十大寺にそれぞれ十万個ずつ分置したものであります。この大事業は、称



無垢浄光陀羅尼および小塔

徳天皇が、天平宝字8(764)年に起こりました恵美押勝の乱を平定後、仏恩に報いるために発願いたしまして、神護景雲4(770)年に成ったものであります。当館では、六度以外の三種類の陀羅尼を小塔とともに所蔵しております。

この百万塔陀羅尼の後、印刷遺品の残されていない時代が二百年以上続きますが、平安中期の藤原道長の頃から、いろいろな祈願や供養のため、摺経や摺仏が行われるようになりました。当館には平安後期頃のものと思われる摺経の断簡及び平安末期のものと思われる摺仏「毘沙門天王画像」がございます。

この摺経供養の影響によって、興福寺をはじめとする南都(奈良)の諸大寺で盛んに仏書が開版されるようになってまいりました。藤原氏の氏寺として繁栄を極めた興福寺は、春日神社の別当寺でもありましたため、興福寺の開版したものは「春日版」と呼ばれております。現存最古の春日版は、寛治2(1088)年刊の法相宗の經典『成唯識論』であると云われておりますが、当館では鎌倉から南北朝にかけての時期に刊行されたものを架蔵しております。そのほかには、鎌倉時代に刊行されました『成唯識論述記』や『妙法蓮華経』などがございます。仏書の開版はやがて京都その他の寺院でも行われるようになりました。当館には、東寺版の『仏母大孔雀明王経』(貞応3, 1224)、叡山版の『妙法蓮華経玄義』(室町時代)、高野版の『大毗盧遮那成仏経疏』(建治3-弘安2, 1277-1279)等が入っております。

このように、平安時代から鎌倉時代末期にかけて開版されました和刻本漢籍はすべてが仏書でした。寛平6(894)年に

遣唐使が廃止されて後、中国との正式な国交は久しく途絶えることになるわけですが、藤原佐世撰の『日本国見在書目録』をみますと、九世紀末葉の時点で既にかなりの数の外典(仏典以外の書籍)の漢籍が我が国に将来されていたことが分かります。その後も僧侶や商人の手によって、漢籍は内典外典ともに、少しずつではありますが輸入され続けております。しかし、この時点ではまだ、和刻されるのは内典のみだったのであります。

鎌倉時代に禅宗が盛んになりますと、貴族や武家が秀れた禅僧の指導を仰ぐようになり、禅宗を中心とする文化が興って、それが書物の出版の方面にも大きな影響を及ぼすことになりました。鎌倉ならびに京都の五山を中心に、禅僧によって禅籍を主とする書物の開版が行われるようになり、たくさんの印刷遺品が現在にまで残されております。それらは「五山版」と称され、当館でも臨川寺刊の『仏果園悟真覚禅師心要』(暦応4, 1341)、夢窓国師の甥春屋妙葩刊の『五家正宗贊』(貞和5, 1349)、法性寺刊の『鎮州臨濟惠照禅師語録』(永享9, 1437)、瑞竜禅寺刊の『仏果園悟禅師碧巖録』(室町時代)、いわゆる「美濃版碧巖録」等をはじめとして、約60部程の存在が確認されております。その中には『夢中間答集』や『聚分韻略』のような国書も含まれておりますが、大部分は宋・元版等の覆刻本ですので、大陸風の版式を持つものの多いのがその特徴となっております。

五山版の刊行は南北朝時代に最盛期を迎え、室町時代末期まで続きまして、地域的にも全国に広がっております。そして、禅籍以外に外典の漢籍も開版しているところに、その出版文化史上の意義を

みることができるかとされております。外典の和刻本漢籍中現存最古のものは、禪尼宗沢刊の覆宋刊本『寒山詩』（正中2, 1325）でございます。次いで春屋妙葩刊の覆明刊本『詩法源流』（延文4, 1359）が挙げられますが、これらはともに当館では所蔵しておりません。当館には、観喜刊の『集千家註分類杜工部詩』（永和2, 1376）、臨川寺刊の『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』（嘉慶元, 1387）、おなじく南北朝時代に刊行された『新刊五百家註音辯昌黎先生文集』『唐朝四賢精詩』『趙子昂詩集』『中州集』、それから『重新点校附音増註蒙求』（応安7, 1374）等十数点がございませぬ。総じて集部に偏った蔵書構成となっていて、經書の類はまったく入っておりませぬ。元來、五山版の外典漢籍は詩文集が圧倒的に多く、他には經書や字書・韻書・類書等が各々若干みられる程度という、かなり偏った内容を示しておりますので、当館所蔵本にみられるこうした傾向も、あるいは止むを得ないものなのかもしれません。

ここで、この五山版に関連して触れておかなければなりませんのは、南北朝時代に、元末の動亂を避けて、中国から俞良甫・陳孟榮ら大勢の刻工が渡來したことであります。彼らは、多くの五山版の開版にも、職人として雇われて携わりました。例えば、先にあげました『唐柳先生文集』や『昌黎先生文集』は俞良甫が、そして『杜工部詩』や『蒙求』は陳孟榮が、その開版に係わっております。彼らの開版活動は、和刻本漢籍に宋・元風の版式を普及させる上で大きく貢献しましたが、なかには随分ぞんざいな彫りのももみられるということでございませぬ。

ところで、平安・鎌倉時代の出版はも

っぱら寺院によって行われてきましたが、南北朝時代以降、少しずつではありますが、一般篤志家の手によっても行われるようになってまいりました。また応永年間以降の傾向として、地方における開版活動が盛んになってきたことも指摘されております。例えば、足利尊氏の重臣高師直は、暦応2（1339）年に『首楞嚴經義疏注經』を開版しております。これは、罪障消滅を願う師直が、この年に創建された天龍寺に委嘱して開版したものとみられており、「師直版」と呼ばれておりまして、当館にもございませぬ。それから泉州堺の道祐居士は、正平19（1364）年に古写本を底本として『論語集解』を開版いたしました。これがいわゆる「正平版論語」で、我が国で開版された經書の現存最古のものとしてございませぬ。これには数種類の版がありまして、当館が所蔵しておりますのは、無跋本の室町末期後印本で、室町時代のものと思われる訓点が施されております。

泉州堺は、瀬戸内海の要衝の地にある港として、南北朝時代から急激に都市的發展を遂げてまいりました。とりわけ十五世紀末に、細川氏がここを遣明貿易船の発航地としてからは、多数の貿易船が出入りする自由貿易港として栄え、富裕な貿易商を中心に様々な活動が展開されました。この地で医を業としてきました阿佐井野家は、大永8（1528）年に『新編名方類証医書大全』を開版いたしました。明刊本の覆刻本であります本書は、我が国における医書刊行の嚆矢でありまして、当館でも所蔵しております。また、同家が天文2（1533）年に、清原宣賢の指導のもとに集解本によって開版しました『論語』、すなわち「天文版論語」もご

ざいます。

この堺と同様、外国貿易によって利益を得ておりました周防の大内や薩摩の島津領内でも、他の地よりも盛んに書物の開版が行われました。応永17(1410)年刊の『歳乘法数』は大内領内での刊行物で、当館にも入っております。しかし、文明13(1481)年に島津領内で全国に先がけて開版され、延徳4(1492)年には再版もされた宋代の新注の『大学章句』はございません。この本の初版本は現在佚亡し、再版本が全国に一部伝存するのみとのことでございます。

以上、室町時代末期までの漢籍和刻の歴史を辿りながら、当館が所蔵しております資料をご紹介しますまいりましたが、もう少し外典の和刻本を付け加えておきたいと思えます。

まず最初は、経部小学類の『韻鏡』(永禄7, 1564)でございます。この本は中国では早くに佚亡した韻書で、我が国へは鎌倉初期に伝来し、音韻学の必読書として重視されてまいりました。当館所蔵本は清原家の旧蔵本ですが、この清原家は室町中期に至ると大いに活躍いたしました。書物の開版事業にも関与しております。先にみました「天文版論語」には宣賢が係わっておりましたが、この永禄7年刊の『韻鏡』は、宣賢が関与した享禄元(1528)年刊本を、宋の慶元3(1197)年刊本によって校訂したもののようであります。

次に史部には、室町時代刊の『立齋先生標題解注音釈十八史略』がございます。朝鮮本の覆刻かといわれております本書には訓点が施され、全巻に室町時代のものと思われる書き入れがみられます。それから天文23(1554)年に今川義元の叔

父龍山雪齋が開版しました『歴代序略』もでございます。当館本は室町末期の後印本で、訓点が施されており、同筆の欄外書き入れもでございます。

次に子部には、南北朝時代の覆宋刊本『列子虜齋口義』がございますが、当館本は医家曲直瀬家や弘前藩の医官渋江抽齋らの旧蔵本であったことが、押捺されている蔵書印から分かります。また『新刊勿聽子俗解八十一難経』という医書が天文5(1536)年に高尾寺で開版されましたが、本書は句読点を附刻した初期挿絵本として、出版文化史上たいへん重要視されているものであります。

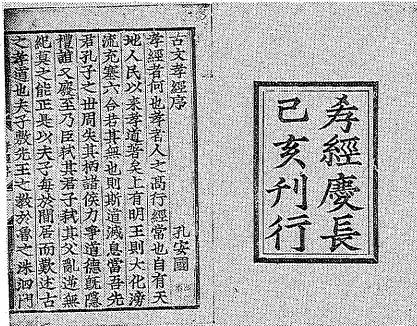
最後は集部ですが、総集類に属するものとして『魁本大字諸儒箋解古文真宝後集』がございます。これは室町時代の覆元刊本で、同時代のものと思われる朱筆の訓点が施されており、先程の『列子』と同様、曲直瀬家や渋江抽齋らの蔵書印が押捺されております。

なお、当館が所蔵しております室町時代以前の和刻本漢籍につきましては、『国立国会図書館所蔵貴重書解題 第1巻』に紹介されておりますので、詳細はこれをご覧ください。

2. 古活字版の時代

文禄元(1592)年と慶長2(1597)年の二度に亘り、豊臣秀吉は朝鮮への派兵を敢行いたしました。この第一回目の派兵の折、戦いを終えて帰還しました武将達が持ち帰った活字及び印刷機を、秀吉は後陽成天皇に献上いたしました。天皇はこれを使って、文禄2年に『古文孝経』を開版したと伝えられております。しかし残念ながら、これまでのところその遺

品は見つかっておりません。この後、天皇は新しく木活字を作らせまして、十種余りの書物を開版させました。これがいわゆる「慶長勅版」で、なかには『四書』（慶長4）や『古文孝経』（同）のような漢籍も含まれております。当館でも『古文孝経』を所蔵しております。現存する『孝経』和刻本中最古のものであります本書は、和様の大型活字を用いた、大変に風格のある版本でございます。



古文孝経

このように後陽成天皇は、舶来の新技術を導入いたしまして書物の開版に係わったわけではありますが、この後半世紀に亘り、我が国ではこの技術による書物の開版が盛んに行われました。これは、江戸時代後期に行われたいわゆる「近世活字本」と区別して「古活字版」と呼ばれております。当館では、この古活字版を約200点ほど所蔵しております。去る平成元年に『国立国会図書館所蔵古活字版図録』が刊行されましたが、これは全体が「仏書」「国書」「漢籍」の三部に分けられていまして、そのうち漢籍は約50点ほどございます。申すまでもなく、これは

外典のみの数であります。

その中から主なものをご紹介しますと、まず後水尾天皇が元和7（1621）年に銅活字で刊行いたしました『皇朝類苑』がございます。いわゆる「元和勅版」であります。それから徳川家康が、足利学校第九代座主三要素元信を京都伏見の円光寺に招いて開版させました『孔子家語』（慶長4, 1599）、『貞観政要』（同5）、『黄石公三略』（同9）、『周易』（同10）、『七書』（同11）などがございます。これらは「伏見版」とか「円光寺版」と呼ばれております。また慶長12（1607）年に駿府に退隠しました家康が、金地院崇伝や林羅山らに命じて、元和2（1616）年に銅活字で開版させました『群書治要』もございます。これは「駿河版」と呼ばれております。豊臣秀頼も、慶長11年に木活字で『帝鑑図説』を刊行し、当館にもございますが、これも家康の影響によるところが大きかったものとみられております。それから上杉家の重臣直江山城守兼続が、慶長12年に京都の要法寺に委嘱して刊行いたしました、いわゆる「直江版文選」も所蔵しております。また、おそらく医者と思われる梅寿軒という人物が、慶長13年に開版しました『黄帝内経素問註証発微』は、初版本・再版本ともにございます。それから明らかに出版書肆の手になると分かる最初のものであります『古文真宝後集』が、慶長14年に本屋新七によって刊行されまして、当館にも入っております。従来開版されたことのなかった『史記』もこの新技術を以て刊行されまして、当館には慶長・元和頃のものと思われる一本がございます。『老子庸齋口義』も、前代には刊行されなかったものでございます。当館本には、全

体に林羅山の書き入れがみられます。これも慶長年間に刊行されたと思われる『詩経』と『春秋経』の二本は藤原惺窩旧蔵本で、いわゆる「惺窩点」研究の貴重な資料のひとつとされており。朱子の『近思録』は江戸時代を通して幾度も開版されましたが、当館が架蔵しているのは寛永年間に刊行されたと思われる古活字版一本のみでございます。

以上、外典の漢籍ばかりを紹介しましたが、この時期に内典の漢籍が開版されなかったわけではありません。平安末期以来、書物出版の中心的な担い手となってきたのは寺院でした。そして、この新興の活字印刷法の流行に拍車をかけたのも、また寺院だったのであります。川瀬一馬著『増補古活字版之研究』付録の「古活字版刊行年表」を見てみますと、寛永初めの頃まで実にたくさんの仏書が、この新技術によって開版されていることが分かります。なかでもとりわけ「叡山版」と「高野版」とが版種が多く、他にも本国寺・要法寺等の京都の寺院で数多く開版されており。当館には40点余りの古活字版仏書がありますが、そのうちの約半分が漢籍に相当します。

その中から主なものを挙げてみますと、まず古活字版仏書の最古のものであります『天台四教儀集解』（文禄4、1595）がございます。本国寺で開版されたとみられている本書は、現存する古活字版の最古のものでもあります。本国寺版には、他に慶長17（1612）年刊の『仏祖歴代通載』がございます。それから妙心寺刊の『鎮州臨濟惠照禪師語録』（慶長年間）がありますが、これはやや行書体を加味した書風の活字を用いた、大変特色のある本でございます。叡山版としては、『伝法

正宗記』（寛永7、1630）や『涅槃経疏』（寛永年間）などがあげられます。また、天海僧正が寛永14年に上野の寛永寺で開版に着手いたしました、いわゆる「天海版大蔵経」の中の『大智度論』や『諸経要集』なども所蔵しております。因にこの「天海版大蔵経」は、我が国における一切経刊行の嚆矢でありまして、三代將軍家光の援助のもとに12年の歳月を費やして完成されました。初めの方は木活字で印刷されましたが、後の方では整版に変わっております。

こうした寺院の開版活動に関連して注目されますのは、初め寺院内あるいはその門前に居を構え、寺の御用を承って出版に従事していた職人が、やがて寺の外の人々の需めにも応じるようになり、次第に出版業者としての地位を確立するに至ったことであります。当時は、営利事業としての出版業は、生産・流通過程における全く新しい部門だったのであります。

この文禄に始まり寛永の初め頃まで盛んに行われました舶来の新技術による書物の開版が契機となり、日本の書物の歴史は、それまでの長い写本中心の時代から版本中心の時代へと転換いたしました。和漢の様々な部門に亘りましたこの古活字版の開版は、近世江戸文化の開花に大きく貢献することになったのであります。しかし、次第に読書人口が増大し、書物の需要が増加してきますと、耐用能力に限界のある木製活字による印刷では対応しきれなくなったことや、この技術では付訓本の組版が難しかったことなどの理由で行われなくなり、整版印刷の復活をみることになるわけであります。

なお古活字版には、この朝鮮系の技術

によるものの他に、キリスト教の宣教師によってもたらされた西洋の活字印刷術によるものもありました。しかし我が国では、慶長17(1612)年のキリシタン禁令によってこちらの技術は早々に途絶えてしまい、ついに漢籍の開版をみることはなかったのであります。

3. 江戸前期—内典中心から 外典中心へ—

江戸時代のごく初期は、このように古活字版全盛の時代でした。徳川家康は学問を奨励し、治政に有益な書物を多数開版させるとともに、慶長12(1607)年、朱子学者林羅山を幕府儒官に登用し、朱子学を幕府の文教政策にふさわしい学問と認定いたしました。こうしたこともあって、元禄以前には程朱学関係の書物が多数開版されました。古活字版の時代は寛永頃まででほぼ幕を閉じますから、そのほとんどが整版印刷によるものであります。

まず経部についてみてみますと、『四書集註大全』(慶安4, 1651跋刊, 鶴飼石斎加點, 当館本は万治2年後修本), 『五経大全』(承応2, 1653刊, 林羅山加點), 『四書輯釈通義大成』(寛文11, 1671)などの大部なものが刊行されまして、当館にも入っております。しかし、大小取り混ぜて相当数が開版された経部の書物の当館における所蔵状況は、決して良好とは云えません。そのなかでひとり小学類だけが、例外的にわずかに面目を保っております。とりわけ『韻鏡』は、寛永5(1628)年刊本から貞享4(1687)年刊本まで、この時期のものだけでも15種もの版を数えることができます。因にこれは、戦後

当館が、国語学者亀田次郎の旧蔵書を購入れたことによるものであります。

次に史部では、『伊洛淵源録新增』(慶安2)や『宋名臣言行録』(寛文7)などを架蔵しておりますが、寛文年間に開版されました鶴飼鍊斎加點の『資治通鑑綱目』はございません。『史記評林』は程朱学とは係わりありませんが、寛永13年に「八尾本」が、寛文13年には「紅屋本」が開版されました。また『漢書評林』も、明暦4年跋刊本が刊行されております。当館では後者のみ架蔵しております。この時期には、史部の書物の刊行は、経部に比べますと、だいぶ少なかったようであります。

子部では、『性理大全』(承応2刊, 小出永安加點), 『朱子語類』(寛文8跋刊, 鶴飼石斎・安井信祐加點), 『周子全書』(延宝元, 1673), 『張子全書』(同3)などがございます。この時期には、朱子学とは別に中江藤樹や熊沢蕃山らによる陽明学も行われたため、この方面の書物も刊行されました。慶安3年刊の『伝習録』はその代表的なもので、当館にもございます。陽明学は、申すまでもなく明の王陽明が朱子学に対して異説を立てたものですが、漢唐訓詁学を捨てて「四書」を重視し、修身の道を説くという点ではたがいに共通するものがあります。この両者を総称して「宋明性理学」と呼ぶ所以であります。明の呉勉学の『宋明四先生語録』は、こうした両者の関係を認識した上で編集されたものかどうかは分かりませんが、「朱子語録」「象山先生語録」「薛文清公読書錄抄」「陽明先生則言」の四者が合刻されております。その和刻本が慶安5年に開版されまして、当館にも架蔵されております。この時期にはまた、

医書と兵書が前代に引き続き盛んに開版されていまして、当館にも、『赤水玄珠』（明暦3、1657）や『武備志』（寛文4）のような大部な兵書が架蔵されております。医家類の『本草綱目』などは、寛永14・承応2・寛文9・同12年刊本等々数本がございます。『老子』『莊子』『列子』の「虜斎口義」が喜ばれたのも前代の余風で、当館には、寛永6年刊の『老子』と同4年刊の『列子』とがございます。老莊二書に関しましては、明の焦竑撰の『老子翼』『莊子翼』に小出永安が加点了ものが承応2年に開版されており、当館でも架蔵しております。中国では失亡いたしました『遊仙窟』という伝奇小説が江戸初期に開版され、その慶安5年後印本が当館にも入っております。中国では淫書として斥けられ、『唐書芸文志』はじめ諸目録にも掲載されることのなかったものですが、我が国では奈良時代にもたらされて以来、長く愛読されてきました。寛文6年には『古今事文類聚』のような大部な類書が開版され、他にも『書叙指南』（慶安2、1649）、『群書拾唾』（承応元、1652）、『五車韻瑞』（万治2、1659）などが、主に詩文を作る際の参考書として開版されておりますが、いずれも当館で所蔵しております。

最後に集部につきましては、経学における程朱学の盛行には係わりなく、依然として前代の五山文学の余風を強く残していき、相変わらず『古文真宝』や『三体詩法』などが盛んに行われました。当館にも寛永7（1630）年刊の『三体詩法』と延宝3（1675）年刊の『古文真宝後集』がございます。また絶句を学ぶのに『聯珠詩格』が好んで用いられたのも五山以来の通例で、当館には寛永9年と

延宝3年の刊本が架蔵されております。『唐柳河東集』（寛文4、1664刊、鶴飼石斎点）や『唐韓昌黎集』（万治3）などは大部なため、この時期に開版されたものが後印されて長く用いられました。当館でも後者を架蔵しております。『詩林広記』（寛文8刊、宇都宮遜庵・鶴飼鍊斎加點）、『氷川詩式』（万治3刊、当館本は後印本）、『詩藪』（貞享3）といった詩文評類に属する書物も開版され、類書とともに詩文を作る際の参考書とされました。これらも当館に入っております。

この時期には、当時輸入された明末清初の刊本を底本として、漢籍の和刻本がたくさん開版されましたが、まだテキストの良し悪しを弁別し、本文の校訂を十分に行った上で刊行されたわけではありませんので、その出来はあまり良くなかったようでございます。また、数多く刊行された付訓本のなかには、誤って読みだしている個所もだいぶあると云われております。いかにも啓蒙期らしい現象といえますが、この付訓本刊行のもつ文化的意義はきわめて大きいと評価されております。

ところで前代までは、和刻本漢籍のうち内典と外典とでは、内典の方が多く開版されていりましたが、この時期以降はその立場が逆転いたします。こうした傾向は、幕府の文教政策にふさわしい学問として朱子学が採用されたことに示されますように、漢学が仏教に対して優位を占めるようになった当然の帰結と云えましょう。先に古活字版の項で触れました「天海版大藏經」開版後に開版された内典漢籍のうち、特筆すべきものに「鉄眼版一切經」があります。

これは黄檗開山隠元禪師の弟子鉄眼道

光が一切経の開版を発願し、18年の歳月を費やして延宝6（1678）年に完成したもので、別名「黄檗版一切経」とも申します。天海版は刊行部数が少なかったため、全国に広く普及するには至りませんでした。この鉄眼版は需めに応じて摺刷されたため、日本全国に大藏経を普及させる上で大きく貢献したと云われています。また、明の「万曆版」（方冊本）を底本としておりますことから、その開版は、これ以降の明朝体の版式の盛行にながしかの影響を及ぼしたものとみられております。当館にも『大乘入楞伽経』『仏説長阿含経』『雑阿含経』などの部分経がございます。その版木が黄檗山万福寺に保存されており、現在も需めがあれば摺刷することになっているようですが、それはともかく、これ以降の内典漢籍の開版には特に目立った動きはみられませんでした。しかし、江戸時代を通して僧侶は書籍商の上客であり続け、とりわけ中期以降になりますと、大宗派にはそれぞれ専属の書肆がついて、その需要を充たしていたようであります。

4. 江戸中期—漢学全盛時代—

さて江戸時代も元禄以降になりますと、出版界の中心が上方から江戸に移るという大きな変化がみられ、また販路拡大による新興書商の台頭といった現象も生じてまいりました。読者層はいっそう拡大し、刊行物の種類の多様化と刊行部数の大量化にも拍車がかけられました。こうした一般的状況のなかで、学術出版としての和刻本漢籍の出版がどのような様相を呈していたかを、寛政以前までをひとつの区切りとしてみてみることにい

たします。

まず経部では、宝永から享保にかけて、荻生徂徠が程朱の宋学を排し、先秦の経書の原点に遡ってその本義を究明すべきことを提唱し、その一派護園の学風は広く天下に普及いたしました。護園では経書の古注を尊重しましたことから、延享4（1747）年には『詩経』の鄭箋が、また寛延2（1749）年には『周礼』の、宝暦13（1763）年には『儀礼』の鄭注が、それぞれ刊行されております。当館には延享4年の『詩経』はございませんが、寛延2年のものが入っております。『周礼』と『儀礼』はともに所蔵してあります。さらにこの時期の特記すべき出版物としまして、享保17（1732）年刊の『古文孝経』と寛延3（1750）年刊の『論語集解義疏』とを挙げることができます。前者は、護園の太宰春台が、中国では既に失われていた「孔安国伝」本を校刻し、それが彼の地に伝わって学界に波紋を投げかけるとともに、鮑廷博編の「知不足齋叢書」に収録されたものであります。後者もまた中国では佚亡していましたが、同じく護園の根本武夷が足利学校本によって校刻し、それが彼の地に伝わって、これも同叢書に収録されております。当館には、前者はございませんが後者がございます。因に『孝経』は、江戸時代には孝道を説く修身書として幼学の素読に用いられたためか、通代多数開版されましたが、当館では、明治期刊本を除くと、僅かに10余点しか所蔵していません。

ところで元禄前後の時期には、幕府の『本朝通鑑』や水戸藩の『大日本史』をはじめとして、歴史書の編纂が盛んに行われました。その影響が和刻本漢籍の開

版にも及んだものか、柳沢吉保は儒臣志村楊州や荻生徂徠らに命じて、明万暦10年刊の南監本正史に訓点を施させまして、『晋書』(元禄14—15)、『南齊書』(元禄16—宝永2)、『宋書』(宝永3)、『梁書』(宝永2—3)、『陳書』(宝永3)などを刊行しております。しかし、これらはいずれも当館には架蔵されていません。またこの企てにやや後れて、寛延3(1750)年頃には堀南湖加点の『新唐書』が、そして安永2(1773)年には、同じく堀の加点本を村瀬栲亭が重訂しました『五代史』が刊行されております。当館には前者はございませんが、後者は文化10(1813)年の後修本がございます。この時期には官撰・私撰の別を問わず、日本各地で地誌が盛んに編纂されました。官撰のもの場合には『大明一統志』をモデルにするのが一般的だったためか、正徳3(1713)年にこれが和刻されまして、当館にも入っております。それから『廬山記』(元禄10, 1697)や『鼓山志』(元禄7 跋刊)のような名勝記、『呉船録』(天明3)や『入蜀記』(同)のような旅行記も開版されております。これは旅がしやすくなり、名所旧跡を尋ねる者の数が増えてきた当時の社会状況を反映していると云えましょう。当館には前の二書はありますが、後の二書はありません。また將軍吉宗が法制関係の書物を好んだことから、享保8(1723)年には『大明律』が荻生北溪の加点によって刊行され、当館にも架蔵されております。それから吉宗の命を受けて荻生徂徠が訓点を施した『六論衍義』が享保6年に、そして護園一派と親交のあった岡島冠山が訓点を施した『康熙帝遺詔』が同8年に刊行されておりますが、ともに当館にはござい

ません。これも当館にはないものですが、近衛家熙が校刻した『大唐六典』(享保9序刊)なども、注目すべきもののひとつと云えるでしょう。

次に子部について、まず儒家類をみてみますと、護園の平野金華加点の『新序』(享保20, 1735)や亀井南冥校訂の『曹大家女誡』(天明8, 1788跋刊)、朱子学の奥田松斎加点の『潜夫論』(天明6 跋刊)や山崎闇齋校訂の『近思録』(安永9, 1780, 新発田藩)、陽明学の三輪執斎校訂の『伝習録』(正徳2, 1712)、古学派の伊藤東涯加点の『塩鉄論』(宝永5, 1708, 徳山藩)や青木昆陽加点の『賈子新書』(元文2, 1737序刊)等々、この時期には様々な学派の学者があるいは加点し、あるいは校訂した書物が、いろいろ刊行されているのが分かります。しかし当館には、ここに挙げました『新序』の他に、延享2(1745)年刊の『荀子全書』など僅か数点が架蔵されているばかりでございます。道家類では、護園の宇佐美瀧水校訂の『老子道德真経』(魏王弼注, 明和7, 1770)や服部南郭校訂の『莊子南華真経』(晋郭象注, 元文4, 1739)などが刊行され、前者は当館にもございます。江戸前期までよく行われました林希逸の「虞齋口義」は、この時期には刊行されていないようであります。法家類の代表的な書物であります『韓非子』(享保2, 1717)、『管子』(宝暦6, 1756)、『商子』(明和3, 1766)なども刊行されましたが、いずれも当館にはございません。また、雑家類・小説家類・芸術家類等々に属する書物もたくさん刊行されていますが、当館が架蔵しているのは、後印・後修本などを含めても、その三分の一にも満たないようでございます。しかし、なかには長沢

規矩也著『和刻本漢籍分類目録』に未収録のものも、まれに見受けられます。例えば芸術類の『投壺新格1巻投壺儀節1巻』(明和6), 譜録類の『魏氏樂器図』(安永9), 天文算法類の『水鏡集約篇』(宝暦2-6)などがそれぞれでございます。この時期にも医家類の書物はたくさん刊行されており、当館にもだいたい架蔵されております。またこの時期に刊行された類書は、ほとんどが架蔵されております。

集部につきましては、五山以来重んじられてまいりました宋詩に代わって唐詩が喜ばれるようになり、『唐王右丞詩集』(正徳4, 1714), 『長江集』(同5), 『孟浩然詩集』(元文4, 1739), 『岑嘉州詩』(寛保元, 1741), 『王勃集』(延享4, 1747)といった別集が刊行され、当館にも架蔵されております。とりわけ徂徠が明の古文辞派に共鳴し、文は先秦、詩は盛唐を標榜して、その門から服部南郭・平野金華・高野蘭亭といった秀れた詩人を輩出したことにより、この風の盛行は決定的となりました。服部南郭は享保9(1724)年に『唐詩選』を校刻しましたが、その結果、本書は広く我が国でも行われることとなりました。本書は明治に至るまで版を重ね、この時期にも幾度か刊行されておりますが、当館にはこの期のものは一本もございません。一方、護園一派からは排斥されましたが、『三体詩法』の人氣は依然根強く、これも前代に引き続き刊行され、この後も幾度も刊行されております。当館が架蔵しているこの時期のものには、元禄16(1703)と享保3(1718)年の二刊本がございます。この時期には、断代の総集類で唐・明以外のものはほとんど刊行されていないようです。『古文真宝』の場合は通代の総集類に属しますが、

これもまた護園一派が俗書として排斥したもののひとつです。しかし、前集・後集とも江戸期を通して刊行されているところをみますと、本書も相変わらず幅広い読者層を獲得し続けたもののようであります。当館架蔵本のうちこの期のものには、元禄3年刊の前・後集、元禄4・宝暦3年刊の前集、享保4年刊の後集などがございます。

この時期には漢学がすばらしく繁栄しまして、護園ばかりでなく諸派が並び立ち、その覇を競い合っていました。享保5年に将軍吉宗が鎖国の禁令を緩和したこともあり、当時長崎を通じて舶載される漢籍の数量は次第に増加してきてはいましたが、それでも需要に追いつくまでには至りませんで、唐本は相変わらず高価だったようです。一般購読者の需要を充たすために多くを和刻本漢籍に依存するという状況は、依然として変わることがなかったのであります。

5. 江戸後期—官版・藩版の盛行と漢訳西書—

寛政2(1790)年、幕府は諸制度改革の一環として学政を改革し、朱子学を正学と定め、他を異学として禁圧する方針を採りました。そして、同9年には昌平黉を官学とし、これを官僚養成のための教育機関としました。この昌平黉が出版しました書物がいわゆる「官版」で、寛政11年以降幕末までの間に、主に漢学の教科書となるもの200種余りが刊行されております。その版本の多くは火災で焼失したり、流失したりしてしまいましたが、幸い残存しました64種が明治42年に「昌平叢書」として再印されまして、当

館にも架蔵されております。この叢書の四部別の内訳をみてみますと、史部が最も少ないのですが、これはもともと史部の書物の開版自体が少なかったことにも因るようであります。

そこでまず当館架蔵の官版史書にどのようなものがあるかみてみますと、『故唐律疏議』（文化3、1806）、『古今偽書考』（文政5、1822）、『八史経籍志』（同8）、『大唐六典』（天保7、1836）などが挙げられます。このうち『八史経籍志』の版本は、維新の際に清国へ持ち去られたものらしく、光緒9（1883）年に蘇州の振新書社から後印本が刊行されており、これも当館蔵書中にごさいます。

経部にも版本が清国へ流失してしまったものがみられます。『広韻』（天保2、1831）や『集韻』（同9）などがそれで、当館にも後者が架蔵されております。経部の官版は、清の納蘭成徳編の叢書「通志堂経解」本を底本にしたものが、全体の三分の一近くを占めているのが、その特徴のひとつと云えます。

子部儒家類の『小学』は寛政11（1799）年に開版されましたが、初学者のための教科書として用いられたこともあり、江戸時代全期を通して、他にも各種開版されております。しかし当館には、この官版が未所蔵であるばかりでなく、めばしいものと云えば刊年不明の田辺藩明倫館蔵版本があるのみでごさいます。また『薛文清公從政名言』は、寛政11年に一度開版され、嘉永4（1851）年に再度開版されております。これは、弘化3（1846）年の昌平覺書庫の火災で版木が焼失し、いわゆる焼版となったためであります。清の孫星衍の「平清館叢書」本を官刻した兵書が、天保4年に4点刊行されまし

た。『六韜』『孫子』『呉子』『司馬法』がそれで、当館には『孫子』と『呉子』の2点のごさいます。天保2（1831）年には小説家類の『世説新語』が開版されましたが、当館には架蔵されておられません。しかし、本書に倣って唐代に続撰されました『唐世説新語』と『南北史続世説』の両書が同3年に官刻されまして、こちらはともに架蔵されております。主として漢学の教科書となるものが開版されたためか、儒家類と雑家類が圧倒的に多く、長沢氏編の和刻本目録をみるかぎりでは、芸術類は『学画浅説』（天保2）、『六如唐先生画譜』（同）、『琴操』（同3）の3点が、道家類は『老子道德経攷異』（天保4）と『朱子周易参同契考異』（享和2、1717）の2点が、農家類は『農書3巻蚕書1巻』（文政13、1830）、譜録類は『硯箋4巻墨経1巻』（文政5）のそれぞれ1点ずつが見出されるのみで、法家類・術数類・天文算法類の書などは全く見当たりません。僅かに開版されました以上の諸書は、『琴操』以外は全て当館にも架蔵されております。

最後に集部についてですが、この時期は唐・宋の古文が流行したこともあり、文化11（1814）年に『唐宋八大家文読本』が官刻されまして、当館にも入っております。また『文章規範』は、文政元（1818）年に覆朝鮮刊本が刊行されましたが、焼版となったため、嘉永6（1853）年に今度は覆元刊本が刊行されております。これはどちらも当館には架蔵されておられません。宋の蘇洵の『宋大家蘇文公文抄』（安政4、1857）、蘇軾の『宋大家蘇文忠公文抄』（同5）、曾鞏の『宋大家曾文定公文抄』（慶応元、1865）なども官刻され、いずれも当館蔵書中に含まれておりま

す。詩につきましては護園が排斥しました宋詩が再び見直され、文政10(1827)年に『宋十五家詩選』が官刻されまして、当館もこれを架蔵しております。しかしこの時期には、梁川星巖のように清詩を貴ぶ者もいれば、館柳湾のように晩唐を好しとする者もいたりしまして、必ずしも宋詩のみが行われたというわけではなかったようです。この時期の特徴のひとつに詩話の類が多数翻刻されていることが挙げられます。官版でも、享和2(1802)年に『蔵海詩話』や『誠齋詩話』などが刊行されまして、当館にも架蔵されております。

ところで「官版」という語を広義に解釈しますと、開成所や医学館などの刊行物もこれに該当するものとみることができるといえます。国際法についての知識が緊急に必要とされた当時、幕府の開成所から『万国公法』の漢訳本が翻刻されました。慶応元年のことで、これは中国で本書が刊行されました同治3(1864)年のまさに翌年にあたります。当館所蔵本は開成所旧蔵本ですが、後印本で、しかも端本でございます。また多紀元孝の私塾として明和2(1765)年に創立されました躋寿館(のち医学館)は、寛政3(1791)年に幕府の経営するところとなりました。ここから刊行されました『備急千金要方』(嘉永2, 1849序刊)は金沢文庫旧蔵の北宋刊本を覆刻したもので、当館にも架蔵されております。

寛政以降はそれまで藩校をもたなかった多くの藩で藩校が新設され、藩士の教育のための機関として機能するとともに、そこで使用されるテキストなどの出版も併せ行われました。とりわけ天保13(1842)年に幕府が諸藩に対して出版

奨励の令を発しますと、それまでも増して有用な「藩版」がいろいろと開版されました。

当館が所蔵しております藩版のうち主なものを挙げてみますと、和歌山藩学習館の『貞観政要』(山本樂所等校、文政6)、津藩有造館の『資治通鑑』(石川竹屋等校、天保7-嘉永2, 当館本は無刊記)、二本松藩敬学館の『明朝紀事本末』(安積良斎校、天保14, 当館本は弘化3後印)、徳島藩の『資治通鑑綱目全書』(文化6)、高松藩講道館の『隋書』(天保15)等々、史部の書物に大部なものが多いのが目につきます。弘化4(1847)年、和歌山藩は銅活字を使って佚存書であります『群書治要』を刊行しましたが、本書はこれより先、天明年間に名古屋藩が整版で刊行しており、当館にはこちらの方がございます。この尾州藩本が清国に伝わり、阮元の「四庫全書未収書目」に著録されることになったのであります。因に前者で使用された銅活字は、家康の駿河版開版時に鑄造されたものであります。加賀藩が弘化元年から嘉永4(1851)年にかけて刊行しました『欽定四経』も特筆すべきもののひとつでしょうが、当館には架蔵されておりません。『詩韻含英』という韻書は簡約で携帯に便利のため、詩人墨客に愛用されました。我が国では文化13(1816)年に烏山侯によって覆清刊本が刊行され、当館にも架蔵されております。本書は、明治になってからも幾度も刊行されたようであります。

ところで当館所蔵の藩版のなかには、庄内藩致道館の『論語』、彦根藩弘道館の『逸周書』(天保2, 1831)、水戸藩弘道館の『明朝破邪集』(安政2, 1855)、津藩有造館の『経世文編抄』(嘉永元-5)など

のごとく、木活字を使って開版した、いわゆる「近世木活字本」もございます。そのうちいかにもこの時期のものらしい珍しいもののひとつに、薩摩藩が安政4(1857)年に刊行しました『航海金針』がございます。本書は英国公使の出資により、1853年に中国で刊行された漢訳の航海気象学書であります。

以上、官版及び藩版について概観してみただけですが、この時期の和刻本漢籍中主要なものは、この官版及び藩版のなかに多く見出すことができると云われております。この両者は、当時の教育や学問の発展に大いに寄与するところがあったようであります。

この他、官吏・学者・名士などの非営利的な出版物であります「家刻本」のなかにも、たくさんの中刻本漢籍がみつめられます。その代表的なものとして、まず寛政11(1799)年から文化7(1810)年にかけて木活字を使って刊行されました、林述斎編の「佚存叢書」を挙げることができます。『古文孝経』をはじめとする佚存書18点を収録した本叢書は、1882年に中国で重刊され、当館にはこちらの方が架蔵されております。英国人W・ミアヘッドの『地理全志』を岩瀬忠震が入手し、安政5(1858)年に塩谷宕陰の序文を付して上篇を、翌年には下篇を翻刻いたしました。当館所蔵本は、江戸の山城屋佐兵衛らが安政6年に上下両篇を合わせて印行したもので、岩瀬の「爽快樓」が蔵版者となっております。本書は、当時の漢籍地理書中最も総合的で優れたものと評されており、維新後も各地の中学校で教科書として採用されたようであります。この時期、大部な類書であります『太平御覧』が刊行されております。

これは安政2(1855)年から文久元(1861)年にかけて、幕府の医官喜多村栲窓が木活字を使って開版したものですが、当館では架蔵していません。英国人医師ホブソンの『西医略論』や『内科新説』などが、蘭方医三宅良斎によって訓点を施され、安政5年と6年にそれぞれ刊行されました。このような漢訳西洋医学書の和刻本の刊行は、開明期にあった我が国に西洋医学を紹介する上で、大いに役立ったとされております。この両書はともに当館にもございます。清の袁枚の詩を市河寛斎が編輯しました『隨園詩鈔』が、文化13年に江湖詩社蔵版で刊行されました。この詩社は本書の編者市河が開いたもので、柏木如亭・大窪詩仏・菊池五山らがあり、清新平明な詩風を志向していました。また佐倉藩儒田中竹所が編輯し、安政4年に開版しました『隨園文鈔』という一書もございます。これらはともに当館蔵書中にも含まれております。

最後に出版書肆による営業出版物であります「町版」の例をいくつか挙げておこうと思います。清の魏源の『聖武記』は、『海国図志』とともに、清朝の阿片戦争敗北が契機となって執筆された警世の書であります。1842年に刊行された本書は、日本へは弘化元(1844)年に初めてもたらされ、老中阿部正弘が入手して以来数部が輸入されましたが、その都度価格は騰貴したと云われております。本書の和刻本は、鷲津毅堂編『聖武記採要』(嘉永3)をはじめ部分的なものが数種刊行されており、当館には、安政3(1856)年に和歌山で山中松窓の校訂によって刊行された『聖武記拔萃』、および江戸末期に木活字で刊行されました「他山之石」という叢書中の摘録本とが架蔵されてお

ります。このうち和歌山の阪本屋大二郎らによって刊行された『聖武記抜萃』は、町版とみてもいいのではないのでしょうか。佐久間象山や吉田松陰らも、本書は和刻本で読んだものようです。宋の陳亮の『龍川文鈔』などは、大橋訥庵校訂本が安政6年に、石原樹等校訂本が文久3(1863)年に、それぞれ江戸と京都で刊行されております。前者は「芥隠書屋」刊となっており、町版かどうか明らかではありませんが、当館所蔵本はその後印本で、和泉屋金右衛門によって刊行されたものでございます。後者は、額田正三郎らによって刊行された町版と思われます。学術図書の部類に属します和刻本漢籍は、どちらかといえば営業出版には不向きなため、江戸時代をとおして幕府や諸藩・寺院・学識者などによる開版が大部分を占めておりました。奥付などに出版書肆の名が刻されていても、それはたんにその発行や販売などの事務をとっただけというケースも多かったということでございます。ある刊行物が純粋な町版であるか否かの判定は、決して容易なことではありません。

清朝考証学の学風の影響と幕府の異学に対する圧迫とが相俟って、我が国でもこの時期には、考証学・校勘学・書誌学などの学問が大いに発展しました。その結果、官版をはじめとする漢籍の和刻本も、善本を選んで底本とし、これに十分な校訂を加えた上で刊行されるようになってまいりました。また「漢訳西書」は、幕末期の我が国に西洋の学問や海外情報を紹介する上で非常に重要な役割を果たしたわけですが、その付訓の和刻本が刊行されているのも、この時期の大きな特徴のひとつと云えるでしょう。

おわりに

以上、和刻本漢籍の開版について、明治維新を迎えるまでを歴史的に辿りながら、当館が架蔵している主なものをみてまいりました。これによって大体お分かりいただけたかと存じますが、我が国における漢籍の翻刻・覆刻の歴史はたいへん古く、経・史・子・集の各部に亘る多種多様な書物が、様々な人々によって、色々な目的のために、数多く開版されてまいりました。そして当館にも、それらのうちの相当数が架蔵されているわけですから、その全容を正しく把握し、紹介するに値するものを漏れなく盛り込んでご紹介することは至難の業です。当然予想されます不備な点につきましては、皆様方からご教示を賜われれば幸いに存じます。

ところで、当館所蔵本を紹介しつつ、未所蔵本についても些か言及しておきましたのは、当館が今後和刻本漢籍を購入するにあたり、何程かの目安を提供できればと考えたからであります。数量的には大分所蔵しているようですが、当然あって然るべきものがなかったり、ある書物の後印本や後修本は所蔵しているが初刷本や元版は未所蔵といったケースもかなりございました。古版本のごとくその伝存の稀なもの入手は現在ではもはや困難ですが、江戸時代に刊行されてかなり流布したものなどは、注意を怠らなければまだ手に入れる機会に恵まれることもあるものと思われます。和刻本漢籍が我が国の文化の発展に大きく貢献したことや、本場の中国で既に佚亡した書物が我が国に伝存し、その和刻本がかの国に

逆輸入されて学界に強い衝撃を与えたケースもいくつかあることを思いますと、その未所蔵本の収集は、国立図書館としての当館に課せられた大きな責務のひとつと云えるのではないのでしょうか。

なお明治になってからも、その前半期には漢詩文の分野などで前代の余勢がまだ続いていまして、既成の版木を使った後印本ばかりでなく、新たに開版されたものもかなりの数に上ったようです。しかし本日は、この明治期の和刻本にまで言及する余裕がありませんので、すべて省略させていただきます。

(主な参考文献)

- ①安田健「漢籍目録の刊行」『国立国会図書館月報』316号(1987) p2-7
- ②中原まする「国立国会図書館の中国関係資料 — 収集の歴史を中心に —」同上360号(1991) p20-27
- ③土屋紀義「国立国会図書館における漢籍収集の沿革とその構成」『参考書誌研究』第39号(1991) p1-14(巻末)
- ④西村正守、佐野力「東京書籍館における旧藩蔵書の収集」『図書館研究シリーズ』No.15(1973)
- ⑤岡村光章・児玉史子・土屋紀義・戸澤幾子「江戸期以前日本出版文化史年表 — 国立国会図書館所蔵資料を中心に —」『参考書誌研究』第41号(1992) p32-59
- ⑥拙稿「フランクフルトで開催された日本の書物の歴史展 — キュレーターの目で展示会を眺めて —」『びぶろす』第42巻4号(1991) p1-11
なお、拙稿末尾に列記した参考文献の多くを、本稿執筆に際しても参考にさせていただいた。
- ⑦阿部隆一「漢籍」『文化財講座日本の美術15 典籍II』第一法規 1983 p9-84
- ⑧中村幸彦「和刻本」『中国文化叢書9 日本漢学』大修館書店 1968 p260-271
- ⑨大庭脩「漢籍の輸入」同上 p243-259
- ⑩中田勇次郎「日本漢学の展開 — 江戸時代以後 —」同上 p10-22
- ⑪三宅正彦「日本における中国哲学の受容と変容の歴史 — 日本人の儒教との出会い —」『中国哲学を学ぶ人のために』本田濟編 世界思想社 1975 p309-345
- ⑫阿部吉雄「日本儒学の特質」『講座東洋思想10 東洋思想の日本の展開』東京大学出版会 1967 p263-280
- ⑬西田元子・牛久敬子「国立国会図書館所蔵和刻本漢籍目録稿」『アジア資料通報』第27・28巻(1990)
- ⑭矢島玄亮『徳川時代出版者出版物集覧』万葉堂書店 1976
- ⑮禿氏祐祥『東洋印刷史研究』青裳堂書店 1981
- ⑯福井保『江戸幕府刊行物』雄松堂出版 1985
- ⑰笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』吉川弘文館 1962
- ⑱今田洋三『江戸の本屋さん — 近世文化史の側面 —』日本放送出版協会 1977
- ⑲大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版 1984
- ⑳増田渉『西学東漸と中国事情』岩波書店 1979

(いさか・きよのぶ 参考課)